島根医科大学紀要，第24巻，1～20頁，2001年12月

原著論文

ゲーテの小説『親和力』
――愛と生を巡って――

(ゲーテ / 愛 / 生)

栗花落　和　彦*

Goethe's "Wahlverwandtschaften"
――On Love and Life――

(Goethe / love / life)

Kazuhiko TSUYU*

Ⅰ　生の単調さと自然の行方

ゲーテの小説『親和力』において読者に最も強い印象を与えるものは，小説全体を支配する単調さである。オッティーリエが叔母シャルロッテの子供を湖で溺死させる不慮の出来事を除いて，とりたてて言及に値する出来事は殆ど何も起こらない[1]。叙述は全く淡々と過ぎ去って行くかに見える。小説の歩みは「植物が永続的なあるいは一時的な完成に向かって進む落ち着いた歩み」(Ⅱ９:423)[2]と同一のものであり，それはまた語り手の「落ち着いた眼差し，静かな徹底性」(同)によって予め規定されている。この作品に登場する主要人物達は一見すると自由を満喫しているように思われる。しかしその自由は生の充足によってではなく生の空虚さによって招き寄せられたものである。彼等は自由を持て余しているのだ。従って小説に見られる単調さは人間生活の現実に必然的に伴う持続の意志の現われではなく，洗練された趣味と豊富な享楽によって見せかけの自由を必死になって埋めようとすることから生じるものである。このことを最も明白に示しているのは，シャルロッテの娘ルツィアーネをその中心とする社交の喧騒である。「荒々しく奇矯な性格」(Ⅱ４:379) を持つ彼女は退屈さのあまり，図書室から持ってきた「極めて奇妙な猿達の絵」(同:382)，つまり「人間に似ていて，芸術家によって更に一層人間化された厭わしい生き物」(同) を顔見知りの人々と比較して楽しむが，一種の「暴力」(Ⅱ５:396) と呼んでよいその不作法な振舞いによって，彼女こそが最も猿に近い存在であることが浮き彫りにされている。彼女は外面的な社交性を発揮すればするほど，その内実は空虚であり，充実した現在に生きているというよりはむしろ過去の因習に引きずられた明滅する瞬間瞬間に翻弄されているのである。このように人物達を取り囲む社会，とりわけ貴族を中心とする社会は時代の退廃を無意識のうちに露呈しており，時代そのものが既に明確な目的を喪失した空無化された状況に傾斜している。ルツィアーネが社交の花に持ち上げられれば上げられるほど，その事態は社会の倫理性の希薄化を如実に示している。このような閉塞された時代状況にあって主要人物達，とくにエードゥアルトとシャルロッテの夫婦もまた決してこの単調さに甘んじていることができない。彼等は現在の生に対して充足感情を見出すことができず，苦い不満の感情を胸に抱いている。恐らく彼等はある宮廷を巡る貴族的な領域に属しており，「この人間達はどんなに内面的葛藤があろうとも外面的な礼儀作法を守り通す高貴な人々のように振舞っている」[3]。彼等は暇を持て余しており，一定の職業を持ってはいない。この領域を代表しているのがエードゥアルトの友人の大尉である。「彼に仕事がないこと，これこそが元来彼の苦しみなのだ」(Ⅰ１:244)。彼等が自己の領地を整備することは，気晴らしから生じているに過ぎない。それによって彼等は辛うじて生の単調さに耐えることができる。結局それはしかし，生から必然的に呼び起こされたものではなく，本来の目的を見失った「隠者向けの」(同:247) の仕事なのだ。彼等はもはや大きな世界を切り開く支配者ではあり得ず，小さな領地を維持管理する有産階級に過ぎない。青春期を漫然と過ごす他はなかった中年夫婦にとって，生はルツィアーネにとってと同様に「退屈」(Ⅰ２:256) 極まりないものなのである。その退屈さを我が身に引

*ドイツ語教室　Department of German

き受けて現実に耐えて行くこと[4]――それはある意味では人間生活の冷厳な現実に呼応する――はその夫婦には不可能なことである[5]。「人は媚びへつらって生に潜り込みますが，生は私達を甘やかしはしません」(Ⅱ７:410) という，オッティーリエが在籍する寄宿学校の助手のこの生の認識に到達し得ない主要人物達の行く手には，日常性の不可視の深淵が待ち構えている。彼等の行動原理は，生を直視して日常性の深化を目指すことではなく，あくまでも日常性の維持あるいはそこからの逃避に固執することである。このような観察を通して作者ゲーテは，小説全体を客観的に見通す位置にある読者に対して，社会生活の中で安易に見過ごされているもの――「風紀と法律」(Ⅰ４:272) に規制されて一見安定しているかに見える生――を省察する機会を提示するのである。この小説がその生の問題を提起するのは，「生の中で繋がり合っているもの」(Ⅰ１:245)，つまり〈愛〉を通してである。愛は人間全ての生における不可欠の主題であり，「固有の内的で不易の関心事」(Ⅱ７:406) である。愛に対する姿勢が肯定的であるにせよ否定的であるにせよ，愛を欠いた生はそもそも生という名に値しないであろうし，「愛を欠いた生，愛する者が身近にいない生は，〈挿話だらけの喜劇〉，つまりは引き出しだらけの出来の悪い劇に過ぎない」(Ⅱ９:427)。生の問題が最も顕わとなるのは愛の在り様においてであろう。愛は相反する力の対立と融合との葛藤の中で成立する。人間が世界の中で他者と何らかの関係を持ちながら存在するものである限り，愛は不可欠である。それが関係存在としての人間の生の現実である。ルツィアーネはしかし「自己本位の我欲」(Ⅱ５:388) を決して払拭することがないがゆえに，最初から他者との関係は存在せず，愛の名に値するものも生じることはない。それに反して主要人物達は他者との共属関係，つまり愛によって互いに深く結ばれ真摯に苦しむがゆえに，ルツィアーネを押し流して行く時代の流れよりも必然的に一段高い次元に立っている。ゾルガーに倣って言えば，彼等は「愛を巡る関係そのものである」[6]と言ってよいだろう。

そして愛を中核として展開される人間世界のみならず，これと極めて密接に連関するものとしてゲーテが等価に描くのが，事物の世界である。人間が引き起こす事件と自然の事物とは，例えばプラタナスの植樹の日付がシャルロッテの姪オッティーリエの誕生日の日付と一致するように，「この上もなく不思議な符合」(Ⅰ１４:334) を示している。確かに人間の側から見れば自己を取り巻く事物は事件の持つ意味を象徴的に露呈するが，事物そのものはあくまでも自律的な歩みを辿っている。むしろ事物はそれ自ら人間との深い生命的交感を確立しているものと見られるのである。このようにゲーテは人間という関係存在をより根源的な位相の下で把握するために，〈親和力〉という本来は自然に適用される法則を利用する。この法則の働きによって人間と事物は互いを鏡のように照射し合っている。そして小説が包含する時間が少なくとも一年半に及んでいることは，人間と自然秩序との極めて深い共属関係を示している[7]。なぜなら自然の推移は一年を終えて円環をなし，それに続く年において初めて自然の規則正しい〈反復〉[8]が認識されるからである。「こうして一年という童話がまたしても始めから繰り返される」(Ⅱ９:426) のである。この反復はしかし直線的あるいは平面的なものではなく，螺旋的あるいは立体的なものとして，「無常なものと持続的なものが互いに絡み合う」(同) 生成を取り込んだ，生と死の存在形式を包摂する。そしてそれは「透明にして不透明な一枚のヴェール」[9]のように小説全体を覆い尽くしている。最初は一見無意味と思われる事物が反復において何らかの意味を獲得する。自然秩序の推移に一致する生の反復に耐え，それに照らして成長し得る者のみが，生において自己を主張することができる。現実のこの姿をゲーテは人間に課せられた不可避の運命として把握するのである。小説執筆の頃の彼に生において強い印象を与えたのは，もはや耳目を聳動する異常な人間でも例外的な事件でもなかった[10]。彼は日常的な現象，しかも永遠なものが啓示されており常に反復される日常的な事象の中に人生の明確な意味を見出している。人間の行動は自分が予感しているよりも遥かに，自己生来の自然，風土上の条件，体質，時々刻々変化する気分や情動などによって色濃く支配されている。にもかかわらず人間は生活を極めて理性的に送ることができるのだとしばしば思い込んでいる。彼は自己自身を信頼して生きようとするが，実際のところ自分は自由意志を持っているのだという錯覚の中で生かされているに過ぎないのである[11]。人間にとっては社会との関係のみならず，自然との有機的な関係も不可欠である。というよりもむしろゲーテが人間と自然との有機的な関係を小説の中に提示したことは，時代の倫理性の希薄化とは倫理的秩序の基礎となるべき有機的秩序の衰退，即ち社会の生命力の老化に必然的に伴う有機的な統一力と形成力の弱体化を意味する，ということを彼が深く認識していたことを逆説的に示しているのである。このようにゲーテが小説で冷厳に描き出すのは，人間が，自己充足している事物の日常的な

それでいて不気味な力と深い共属関係を持っており，その結び付きを忘却した人間に対して事物が厳しい罰を下そうとする運命の諸相である。自然の事物が胚胎するこの運命的なものが，事物を意味ある形象として捉える人間の想像力を避け難く呪縛するのである。ここにおいて人物達は初めて自己の運命を自覚する。彼等は自己の立場が相対的な限られたものに過ぎないということに気づくことによって，自己の本質をそれなりの方法で顕わにする。従ってこの小説では，自然の力そのもののみならず，そこから人間が自己の運命を読み取る際の人間の想像力もまた，鋭く問われているのである。小説を鳥瞰的眼差しで凝視する作者ゲーテは，作中の人間達に自己の本質を模索させることによって，逆に人間と事物からある一定の距離を保ち続けている。それゆえ彼は詩におけるように自己自身の生を直接的に描写したというよりもむしろ，小説においては人間と事物の世界全体を客観的な総体的視野の下で冷静に表現したと言ってよいだろう[12)]。

以上のことを考慮しつつ，まず始めに，社会生活の基礎を構成するのみならず愛を生に結び付けるべき結婚の在り様を，エードゥアルトとシャルロッテの結婚に照らして考察したいと思う。

Ⅱ　結婚の意味するもの

エードゥアルトとシャルロッテがそれぞれ以前に営んでいた最初の結婚は物質的利害からのみなされた打算的な結合であった。二人は，若い頃から互いに心から愛し合っていたにもかかわらず，気にそまない因習的な結婚に同意せざるを得なかった。これらの結婚には真の愛もなければ，魂を燃え上がらせる情熱も欠けていた。それゆえ彼等の心には互いへの内なる愛情が秘かに存続している。彼等は各々の相手を失った後に再会して，失われた時を取り戻すために結婚する。しかしそのことにも増して彼等が結婚に踏み切るのは，自分達が今や過去の因習から完全に自由であるということを自ら立証するためである。シャルロッテはエードゥアルトに対してこの自由を次のように根拠付ける。

> 「こうしたことは全てあなたの同意を得てなされたのです。しかもそれは，私達が二人だけの生活をしよう，以前にはあれほど熱望し後になってようやく手に入れた幸福を誰にも邪魔されることなく楽しもう，というただそれだけのためにね」（Ⅰ１:246)

そしてエードゥアルトが「頑なな，いやそれどころか伝奇小説めいた忠誠心によって」（Ⅰ２:249)「自分の唯一の幸福と見做すもの」（Ⅰ１:246)，即ちシャルロッテを獲得したことは間違いない。しかし彼が彼女の意図に早くも異議を唱えて，自分達の生活を変えてくれる期待の人物として，大尉を館に迎え入れる提案を彼女にしたことは，つまり結婚において最初から「第三者」の介在を許すことは，この結婚が彼が予期していたほど魅力的なものでなく，今や彼には耐え難いものとなりつつあることを意味している。少なくともエードゥアルトにとってこの結婚は過去の因習の清算ではあるが，決して自己本来の自由実現への道ではなかった。この結婚によっては満たされ得なかった生の領域を拡大しようとする彼の意図は，彼が牧師ミットラーの助言を得ようと急ぐあまり，常日頃は足を踏み入れるのを避けている墓地を通って敢えて近道をする場面に象徴的に現われている。他方シャルロッテは大尉を呼び寄せることで惹起されるであろう「憂慮」[1)]に襲われる。

> 「それなら率直に告白させて下さい」シャルロッテは少しイライラして応じた。「こんな企ては私の気にそまないものですし，良くないことが起こりそうな予感がするのです。…どんな状態であれ，第三者が割り込んでくることほど重大なことはありませんから」（Ⅰ１:247-8)

ここにおいてシャルロッテが彼女なりに親和力の自然法則を予感してそれを回避しようとしていることが明白となる。彼女はしかしこの予感が一体何を必然的に伴うであろうかをまだ知らない。そのことを暗示するのは，彼女が大尉への手紙の後書きを汚してしまうインクの染みである。エードゥアルトはそれとは反対にこの法則に何の予感も抱かない。むしろ彼にはこの法則を無意識のうちに手助けして活動させる役割が与えられているものと見做される。ゲーテはエードゥアルトについてこう語っている。「いずれにせよ彼には多くの真実味がある。というのも上流階級には，彼の場合と全く同様，〈我意〉が〈性格〉に取って代る人々が十分見受けられるからだ」[2)]。また評論『限りなきシェイクスピア』でゲーテは「〈性格〉の面から考察すれば，人は〈当為sollen〉に従うものだ」[3)]，と述べている。しかし他ならぬこの〈当為〉の欠如のために，エードゥアルトには〈我意〉が〈性格〉を圧倒している。というのも「エードゥアルトには歳を重ねても常にどこかしら子供っぽいところが残っていた」（Ⅰ７:

289）からである。彼はいわば無防備にこの世に放り出された子供であり，大人の年齢になっても幼児性を持ち続けている人間である。それゆえ彼は事実大人に成熟することができない。彼にとって愛の対象は結局のところ，「自分が他者に貸しているもの，つまり自己であり，他者についての自らの表象」[4]であると規定される自己愛の所産に過ぎない。このような愛はある意味では一回的なものであり，一度失ってしまえばもはや償うことのできないものであろう。彼がシャルロッテを「男の片意地」（Ⅱ１４:460）をもって再び獲得しようとしたことは，この自己愛の残照にのみ帰せられる。彼が後悔の念をもってそのことに気づくのは遥か後のことである[5]。シャルロッテはピアノ伴奏で端的に示されるように，彼にとって「上手な指揮者と利口な主婦という二重の義務」（Ⅰ２:257）を果たす良き妻ではあるが，もはや愛の本来の対象となり得ていない。シャルロッテとエードゥアルトとの関係は夫婦関係からいわば母子の関係へと奇妙な捩れを起こしている。彼はなるほど愛される息子の位置を占めることはできたが，妻と結婚生活に対する責任を全面的に担い，〈当為〉を果たす夫の役割を完璧に演じることはできなかった。彼をオッティーリエへの情熱的な愛へひたすら駆り立てるのは彼の無意識な幼児性に基づく〈我意〉の所産である。愛が結婚という絆に，つまり人間の行動を大幅に制約する現実的な関係に根付くことは，エードゥアルトのような〈我意〉を保持し続ける者にとっては恐らく愛の理想から結婚の現実への転落を意味する以外の何ものでもないと言ってよいだろう。

ゲーテは愛と結婚の関係についてこう述べている。「愛は観念的なものであり，結婚は現実的なものである。そして観念的なものと現実的なものを取り違えると必ず罰せられるのだ」[6]。愛は一組の男女をいわば情熱の炎で結び付ける行為であるが，結婚はその情熱の炎を彼等がどのくらい長く保持し得るのかに関わっている。愛の目的は生の最高の瞬間のひとつである両性の結合であるが，結婚の目的は生そのものであり，持続への絶えざる意志である。ここには結婚と自然との，移ろい行くそれでいて不変の営為の一致が見出される。ゲーテはそのことを次の言葉で語っている。「結婚の目的は生そのものです…。そして私達が内に向かって自分の義務を果たしたなら，これは外に向かって自ずと現われてくることでしょう」[7]。つまり結婚がかなえられた瞬間に「その幕は下り，瞬間的な満足が私達の胸に余韻を残す。現実界ではそうはいかない」（Ⅰ10:309）。生活は結婚の幕が下りたところで始まり，「その背後でずっと続けられる」（同）のである。その事態をはっきりと示すのが《隣同士の不思議な子供達》と題された作中のノヴェレ（Ⅱ10:434-42）である。大尉の生に極めて数奇な影響を与えるこのノヴェレが小説の枠の中に嵌め込まれることによって，本来の時間と空間が一変する時，ヴァルター・ベンヤミンが「救済のモティーフ」[8]と呼ぶこのノヴェレは，大尉にとって「哀しい追憶」（Ⅰ４:268）へと変貌する。ノヴェレが大尉の体験を媒介として小説の世界に繋がれる時，愛と生との対比は一層際立ったものとなる。ノヴェレの中には結婚において頂点をなす愛が確実に存在するが，現実の生は未だ欠如したままである。それに反して小説の中には，小説が始まる前の時点で誰も祝福を拒むことができなかったはずの結婚に何らかの理由で既に終止符を打ち，愛と生を結局結び付けることのなかった大尉が佇立しているのである。結婚生活は，眼前に争う余地なく存在するものがどのような意味を持ってしても否定し難いということを認めることができるのか否か，つまり他者の存在にどこまで耐えることができるのか否か――しかも「互いの愛情深い強制」[9]をもって――に全く依拠している。このことが洞察されない時，結婚生活は不幸な結果に終わらざるを得ない。この意味でエードゥアルトとシャルロッテの結婚は明らかに失敗に帰したと言ってよい。ゾルガーは既にそのことを示唆していた。「最初の不遜さはこの場合，大尉とオッティーリエを呼び寄せる決意の中にあるに留まらず，賢明にも神によって切り離されていたエードゥアルトとそのかつての恋人[シャルロッテ]とが結び付けられる不安定な状態の中にも既に胚胎している」[10]。彼等の「互いの共同生活」は実のところ「追憶の中を旅行して回る」（Ⅱ１:247）ことに過ぎず，彼等は自分達が陥っている現実を直視することができない。彼等は本来現実に依拠すべき未来への眼差し，生への絶えざる意志を持たない。〈過去〉が追慕されるという希望に依拠する生は幻想であり，空虚な仮像に過ぎない。そしてその過去さえ，彼等の願望が実現されてしまうと，その魅力を急速に失ってしまうのである。愛は本質的に〈生きた現在〉に深く関わるものであるがゆえに，彼等の結婚は結局希望のないものであり，エードゥアルトの自己愛とシャルロッテの現実的妥協とによって辛うじて成立しているに過ぎない。それは内面的な倫理的堅固さによって支えられてはおらず，既に崩壊の危機に脅かされている。この結婚は感覚的なものを克服し得る高次な倫理性を持っているというような二項対立とその克服を大前提とする認識で，小説を解釈しようとする試みは全く無効であろう[11]。

〈Ⅰ〉で前述したように，ゲーテは人物達を取り巻く社会の外面的既成道徳を無条件に認めてはいない。それはあくまでも小説の素材として利用されているに過ぎず，作者の批判的な眼差しに予め曝されている。オッティーリエの日記において「礼儀上のことに対して繊細な感情を持っている人間達」(Ⅱ５:397) の一人と呼ばれているシャルロッテでさえも，娘ルツィアーネの不作法な振舞いを咎めることがないばかりか，「婚約と青春の最初の陶酔が醒めてしまった時の娘の幸福を彼女は確信していた」(同:394-5) と語り手が付言する言葉そのものの中に，彼女が時代の退廃とは決して無縁な存在であり得ないことが明らかに示されているのである。ゲーテはかつて，この小説を不道徳と非難するある婦人にこう語ったことがある。「本書の中の掟は真実です。この書物は不道徳なものではありません。あなたはもっと大きな視点からそれを考察しなくてはなりません。つまり通常の道徳的尺度などは，このような人間関係の下では非常に不道徳なものとなりかねないのです」[12]。エードゥアルトとシャルロッテの結婚は内面的な倫理性の基礎を持たされておらず，小説は最初からこの結婚において希薄な倫理性を前提としている。それと対立して今やもう一つの力，即ち自然のみならず人間をも根源的に支配する〈親和力〉という法則が現われる。そして同時にこの法則を認識することを重要な契機として，小説の更なる展開の中で，人間存在の本源にまで迫る高次な倫理性が見出されて行くのである。

Ⅲ　植物的自然

エードゥアルトが初めてオッティーリエに魅了されたように見える館での出会いは，読者に極めて不思議な印象を与える。

> 次の朝エードゥアルトはシャルロッテに言った。「あれは感じが良くて面白い娘だ」「面白いですって？」シャルロッテは微笑みながら答えた。「だってあの娘はまだ口をきいていないじゃありませんか」「そうかい？」エードゥアルトは考え込む様子で応じた。「何と言っても不思議なことだな」(Ⅰ６:281)

この会話からは，エードゥアルトが予感するある決定的な力が彼に働き掛けていることが感じ取られる。オッティーリエは誰にも話し掛けてはいない。しかしまさにそのことによって彼女は自己の美を示す[1]。言葉を通してではなく，彼女を目で見ることによって，その寡黙さ・身振り・形姿においてエードゥアルトは彼女の美を，そして無意識のうちに彼女の存在全体を認識する。〈オッティーリエ Ottilie〉という名前は本来，〈オッディーリエンベルクOdilienberg〉という町で盲人と眼病者を治癒する奇蹟の女性として崇められた聖女〈オッディーリアOdilia〉に由来している[2]。それゆえ意味深長にも彼女は「真の意味で眼を慰めるもの」(Ⅰ６:283) と呼ばれている。

> というのはエメラルドがその素晴らしい色彩で視覚を楽しませるとすれば，いやそれどころか幾らかの治癒力をこの高貴な感覚に及ぼすとすれば，人間の美というものは更に一層大きな力で外的感覚および内的感覚に働き掛けるものだからである。(同)

エードゥアルトには精神的なものと自然的なものの均衡が欠けており，また現実感覚が欠けているがゆえに，彼は幻想の中に生きており，オッティーリエの美に惹かれるのは必然の成り行きと言えよう。しかしまた彼女の美は彼に美が胚胎する危険を体験させる。そしてこのことが，後に彼が大きな情熱を持って危険なものの美を求める根本的な原因となるのである[3]。彼にオッティーリエの美を感得させるこの決定的な力をゲーテは〈デモーニッシュなもの das Dämonische〉と呼んでいる。エードゥアルトにとってこの〈デモーニッシュなもの〉は愛を成立させる不可欠な構成要素である。ゲーテはこう語っている[4]。

> 私達だけで愛は成立しない。私達を魅了する愛の対象がある。それから忘れてはいけないことだが，強力な第三のものとして，あらゆる情熱に常に付き纏い，愛の中でその本領を発揮する〈デモーニッシュなもの〉が更に付け加わって来るのだ。

老ゲーテは，自己の存在の根底をなし自己の生の現実を揺り動かす不気味な力を体感しており，『エッカーマンとの対話』や『詩と真実』の中でしばしば〈デモーニッシュなもの〉に言及している。『詩と真実』では次のように述べられている[5]。

> 彼が自然――生命のあるおよび生命のない自然，魂のあるおよび魂のない自然――において発見できると思ったものは，矛盾のうちにのみ顕現するがゆえに概念によってもましてや言葉によっても

捉えることのできないものだった。それは神的なものではなかった。非理性的であると思われたから。それは人間的なものではなかった。悟性を持たなかったから。それは悪魔的なものではなかった。善意を持っていたから。それは天使的なものではなかった。悪意の喜びをしばしば気づかせたから。それは偶然に似ていた。連続を示さなかったから。それは摂理に似ていた。連関を暗示したからである。私達を限定する全てのものを，それは貫いていると思われた。私達の存在を構成している必然的諸要素を，それは思いのままに操っていると思われた。それは時間を収縮し，空間を拡大した。それは不可能なことのみを喜び，可能なことを侮蔑の念をもって退けると思われた。自分以外のあらゆるものの間に入りこんで，それらを分離しては結合すると思われるこの存在を，私は〈デモーニッシュ〉なものと名付けた。

ゲーテは〈デモーニッシュなもの〉を逆説的な概念を用いて，否定的な言辞を積み重ねる形で規定している[6)]。〈デモーニッシュなもの〉という明確な主語にはそれを規定する明確な述語が欠けている。『エッカーマンとの対話』において彼はそれをただ「言葉では表現し難いこの世界および生の謎」[7)]，そして「悟性や理性によっては解明し難いかのもの」[8)]と辛うじて呼んでいるに過ぎない。恐らく彼は，〈デモーニッシュなもの〉の定義付けが問題となる時，概念的思考の限界を明確に自覚していたと言ってよい。それゆえ彼の発言から〈デモーニッシュなもの〉に対する一義的な概念規定を導き出すことは極めて困難である。彼は，運命的に自然と人間を支配する〈デモーニッシュなもの〉を，探究し難いがそれでいて自明なものと，畏敬の念を込めて直観している[9)]。それが彼にとって「真の知恵の根底」[10)]なのである。ゲーテは小説の中に愛をもたらすこの〈デモーニッシュなもの〉を，本来は自然科学の領域に属する〈親和力〉という自然法則の形で現わしている。「著者自身による広告」[11)]の中で彼は，『親和力』という表題を敢えて用いた理由をこう伝えている。

著者は自らが続けて来た物理学的研究によってこの奇妙な表題を付ける気になったものと思われる。自然論においては，人間知の領域から遥か遠くに隔たったものをより分かり易く近付けるために，非常にしばしば倫理的な比喩を利用するということに著者は気づいたのかも知れなかった。そういうわけで彼もまた恐らく一つの倫理的事例の形で化学的な例え話をその精神的根源に遡及させたかったのだろう。…

この「精神的根源に遡及」する力がまさしく〈デモーニッシュなもの〉であり，内的自然である自我と外的自然である世界とを支配する普遍的な自然法則である。大尉は〈親和力〉を説明するために石灰石を用いた実験を一例として挙げている。

「このような[石灰]石の一片を希硫酸の中へ入れると，この酸が石灰に作用して，石灰とともに石膏となって現われます。それに反してあの弱い気体状の酸は逃げてしまうのです」(Ⅰ４:274)

彼はしかしこの弱酸が逃げて行く場所とその後の新たな結合については明確に言及しない。従ってこの事例は〈親和力〉の完全な説明とは言い難く，ただ弱酸から生じた気状の酸（炭酸ガス）が無限にさ迷って水と結合し，鉱泉として人間の役に立つことが付言されているに過ぎない。これは既に〈親和力〉が招来する悲劇を暗示している。このような自然法則が人間に作用する時，愛の関係が生じる。それは人間が世界と関わる存在として，もう一人の自己を見出すことを意味する。愛を成立させる〈親和力〉は，愛し合う二人の理想的な出会いに際して張り巡らされる，いわば「磁場」の役割を果たしている[12)]。ここには互いを選び出すという意味では相手への選択が確かに働いているが，どちらが先に選択したのかは，本質的に問題とはなり得ない。そのことをシャルロッテは彼女なりに見抜いている。

「…でも私ならこの場合認めるのは，決して選択ではなく，むしろ自然的必然の方でしょうが，これも殆ど認められないでしょう。と申しますのも，それは結局のところひょっとしたら全く機会の問題に過ぎないのかも知れませんから」(Ⅰ４:274)

愛に選択が存在すると主張するなら，これはまさに「相互的なもの」(Ⅱ７:413) であり，「磁力」[13)]の下での正と負と同様に等価である。この教養ある人々の談話において特徴的なことは，エードゥアルトが〈親和力〉の定式を単なる「例え話」(Ⅰ４:276) として挙げることによって――その際彼は自分を大尉に，シャルロッテをオッティーリエに結び付ける――，シャルロッテにオッティーリエを呼び寄せることを勧め，何

らの犠牲を払う必要もなく，平和な共同生活を営むことができるのだという大きな希望を抱いていることである。この結合がやがて交叉し合うことをまだ誰も見抜いていない。ここに人間の驕慢が示されるが，〈親和力〉が「高次な使命」(同:275) を持つものである以上，それは人間の楽観的予測を拒否し，人間の意志を無効にする。人間の出会いはなるほど本来は偶然に過ぎないが，〈親和力〉が必然的契機として作用する時，偶然的なものは必然的なものへと高まり[14]，不可避的に愛が成立する。このような愛の成立過程は結婚の崩壊と歩調を合わせている。愛が基礎にあるはずの結婚生活に愛が欠如する時，それは必然的に崩壊せざるを得ない。ゲーテはこの過程をしかし，愛憎を単純に小説の中心に置くことによって直接的に描くのではなく，人間の世界が自然力によって不気味に滲透される位相の下で探究している。樹木や湖といった周囲の自然のみならず，エードゥアルトとオッティーリエの署名入りの台付きグラスや一枚の紙片といった日用品もまた，測り知れない不気味な力を潜ませている。人間達はこの力に気づかず，無自覚なままに自己自身の力を頼りに明るい未来を夢想している。彼等はなるほど自然を支配することができると信じているが，ますますその必然性の深淵に陥って行き，生は解き難い謎に変貌する。事物の名状し難い力は人間存在の根底を脅かし，未来への希望は根拠のない妄想に過ぎないことが露呈する。彼等は自分が自由であると振舞えば振舞うほど，その自由は厳しく制約されているのである。

ある意味で親和力の法則に深く支配されているのは，シャルロッテである。彼女は根源的自然力の現存をはっきりと自覚している。その自覚は彼女にこの自然力の支配から逃れるように仕向け，彼女は自己の生活空間を理性の意志力で囲繞し守ろうと骨を折る。そのため彼女だけは決して館を去ることがない。彼女は墓石の周到な配置と明るい芝生の緑によって死の影を墓地から放逐し，あらゆる有害なものを遠ざけようと努力する。そして「申し分のない均衡」(Ⅰ１２:326) をもった「明るい理性的自由の王国」[15]の内部で生きることを何よりも願っている。本来庭園を造ることは，無規定の荒々しい自然を人間が人工的に区分し，そこに人間優先の秩序を作り上げることを意味しているが，庭園を整備する意志の中に象徴的に現われるこの秩序感覚こそは，シャルロッテの生の存在形式であり，それはまたこの堕落した時代に対して彼女がなし得る限りの最大の抵抗の現われなのである。彼女のこの仕事を助けるのが，土地測量に大いに熟達している大尉である。彼は自然に対して無計画に取り組むのではなく，磁針を用いて地勢を調査し，鳥瞰的な展望から概略図を描いて行く。それゆえ彼は彼女の仕事を「喜びと刺激を与えはするが，満足を与えはしない」(Ⅰ３:261) つぎはぎ細工と的確に批判することができるのである。そしてまた彼は彼女の仕事に潜む虚構性を認識している。「単に道楽からこういったことに取り組む人々全てと同じく彼女にとっては，何か仕事が行なわれるということよりも，自分が何かをするということの方が大事なのだ」(同)。この洞察の基礎をなしている彼の高次な秩序感覚が彼女の心を惹きつけるのは当然のことである。しかし親和力の法則が彼ほどの理性的な人間をも抵抗し難く貫いていることは，時間の自然な流れを人工的に区切る時計のぜんまいを彼が巻き忘れることによって如実に示される。とはいえ大尉とシャルロッテの間に働く親和力は，二人が理性的活動である造園を通して作用し合う以上，相対的には弱いものに留まっている。大尉はエードゥアルトにこのように明言する。

> 「一つのことだけははっきりと決めておこう。つまり，そもそも仕事となっているものは全て生活から切り離すことだ。仕事は真面目さと厳しさを要求するが，生活は恣意を要求する。仕事にはこの上もなく純粋な首尾一貫性が必要だが，生活には首尾一貫しないところが必要な場合もしばしばある」(Ⅰ４:266)

この言葉には，自分の置かれた一切の状況が見え過ぎてしまい，人生を諦観してしまった男の悲哀が響いているようである。固有の名前が最後まで明かされない――むしろ作者によって意図的に持たされていない――彼は自分の行為の全てにおいて「大尉」(後に少佐) という軍隊の階級に自らを限定し，この階級が彼に課する義務意識に従ってのみ行動する。どんな状況においても彼はあくまでも大尉であり続け，その限界を決して踏み超えることはしない。彼が自己を限定しようとするのは，愛と憎しみ，牽引と反発の間の最高の緊張の中を生きたノヴェレでの不思議な体験が呼び起こすあの悲しい追憶に終始拘泥しているがゆえである。彼はこの体験の後は根本的に愛し愛されることを断念し，ただ自己の仕事のみに生きているのである。

> …伯爵と話し合った時，伯爵が彼の心の中にしばらく眠っていたもの全てを煽り立てたので，自分は厳密に言ってここでは自己の使命を果たしてはおらず，要するにただ遊び半分の仕事をしながら

ぶらぶらしているに過ぎないことを却ってはっきりと感じるようになっていた。(Ⅰ12:322)

大尉は館におけるシャルロッテの仕事が本来の目的を持った意義ある活動ではなく，彼女を絶えず脅かす無為から彼女を解放するために辛うじて役立っている「遊び半分の仕事」に過ぎないことを見抜いている。愛ではなくあくまでも職業的使命が既に彼の生の存在形式なのである。彼は結局彼女との結婚も「ある有利な結婚」(Ⅱ10:428) も決意することはないし，ノヴェレにおける「青春の力と愛の活気」(同:441) も呼び戻すこともはやない。なるほどシャルロッテと大尉は愛し合っていることを認めて，秘かにそのことに苦しむが，不可避の人間的矛盾に身を曝すことは決してしない。彼等の関係は，シャルロッテ自身が言うように，「本当に意味深い友情」(Ⅰ４:273) に留まっており，ノヴェレの中の子供達のように彼が彼女を「救いたいという熱望が他のあらゆる考察を凌ぐ」(Ⅱ10:440) ことは決してない。彼等は，まさに人間が人間であるがゆえに陥るはずの限界状況に達する以前に，互いを断念したと思い込んでいる。彼等の倫理的一貫性の帰結である諦念は実のところ楽観的な自己欺瞞に過ぎない。彼等は罪を犯すこともなければ，因習からの自由を実現することもない。彼等は，実体が無と化している安定した幸福な生活への意志を放棄することは決してない。彼等はこの時代において到達し得る限りの自己の秩序感覚を持ってはいるが，逆にそれによって自縄自縛に陥ってしまっているのである。

エードゥアルトとオッティーリエは大尉とシャルロッテ以上に強く親和力の法則に結び付けられている。この関係においてその端緒をなしている，植物の沈黙にも似たオッティーリエの沈黙は極めて特徴的である。それは教養ある人々の雄弁と際立った対照を見せている。彼女にもなるほど雄弁な時期があったことは否めないが，それは語り手がただ間接的に証言しているに過ぎない。彼女の沈黙はいつも印象的である。他の人々は主観的確信をもって話すが，次々と明らかになって行く事実が，このような確信は現実とは一致しないことを徐々に暴露して行く。彼等の雄弁が実のところ軽薄であり，確信が驕慢であることが明白になるに従って，最初幼いものと思えたオッティーリエの沈黙は次第に意味を獲得して行く。沈黙は彼女の全存在の重みを担っている。本来人間の高貴さは人格と言説との均衡の上で初めて成立するものであろう。その均衡が破綻する時，高貴さは疑問視される。とくにシャルロッテは高貴な人物と見做されているだけに人格と言説との一致が崩れる時，彼女の理性の限界が露呈される。そもそもこの小説において問題となっているのは，人間の倫理性のみならず，言葉の倫理性でもあるのだ。尤も他の人々の驕慢さが崩壊して行く過程は，否定し難い現実に直面することを契機とする真実への認識過程でもある。なぜならこの過程において先行の発言は後続の発言によって抗い難く訂正されて行くからである。言葉の真の意味で反省する人々は殆どいないか，いたとしても遅きに失している。他方オッティーリエの沈黙は決して無感覚なものではない。彼女の言葉は身振り，とくに拒絶のあの不可抗の身振りであり，それは両手を心から重ね合わせて身体を屈めることに具現されているのである。

彼女の沈黙と際立った対立を見せているのはミットラーの雄弁である。伯爵と男爵夫人が間もなく館にやって来ることを聞いた時，彼が憤慨して行なう演説[16]は，それが結婚の不可侵性に関する一般的な見解を述べているだけに，反駁し難いものがある。キリスト教は禁欲的倫理性，厳格な一夫一婦制の遵守を要求する。結婚は神によって定められた不可侵の根本的生活秩序である。キリスト教倫理は結婚以外に行なわれる全ての性的関係を断罪する。ミットラーの演説はしかしながら普遍的なものが個別的なものに，即ちエードゥアルトとシャルロッテの結婚に当て嵌まらないことを端的に示している。彼の演説は人間の弱さを嗅ぎ付けることで彼を有頂天にさせ，彼はこの弱さを得意気に暴こうとする。彼は自分が絶対視する神の道徳が現実の中で必ずしも妥当しないことを認識することができない。時代そのものが，人々が神の普遍的理念に従い得る幸福な時代ではもはやないのだ。これに反して伯爵の見解の方がもっと率直であり現実的である。語り手もまた彼の見解に対してはミットラーのそれとは異なり一切批判を加えてはいない。彼は自らが現実に結婚崩壊の危機の前に立っているのみならず，結婚を両性間の力動的な緊張に満ちたものとして把握している。この意味で彼の結婚観の方がミットラーのそれよりも他の人々に大きな影響の影を落としている。

「残念なことにそもそも結婚というものには――より激しい表現をお許し願いたいのですが――愚かしいところがあります。結婚は最も微妙な関係をすら駄目にします。そのくせ実を言えばその原因は，少なくとも一方が些か自慢にしている図々しい確信にのみあるのです。万事が自明のものとなってしまい，それぞれがこれからはわが道を行くためにだけ，夫婦になったものと思われるのです」

(Ⅰ10:313)

彼の見解はエードゥアルトとシャルロッテの崩壊しつつある結婚に対する間接的な批判として解釈される。エードゥアルトは結婚から逃避しようとし，シャルロッテは結婚生活への「図々しい確信」の中で安住しようとする。二人とも自らが直面する現実の中で戦う力を欠いている。伯爵と男爵夫人はそれに反して，自分達が直面している困難な状況を把握している限りでは，処世術に大いに長けている。世間知によって彼等は「二重の結婚」(Ⅰ９:304) を無事に切り抜け，生活の様々な状況を受け入れては捌く自由闊達な振る舞いと表面上のこだわりの無さによって自己の正当性を主張することができる。もちろん彼等の生の目的は「市民社会の幸福と利益と快適さ」(Ⅰ４:267) を増すことを目指すのではなく，ただ個人生活を自己のためにだけ確保することを目指しているに過ぎない。この目的を達成するために不安定な遍歴を続けている限り，彼等は小説の主要人物達にとっては結局のところ別世界の人間と見做されよう。彼等はしかしエードゥアルトとシャルロッテの姦通に決定的な影響を与えている。その直前にエードゥアルトは，男爵夫人と密会したいという伯爵の願いを認める。「ある奇妙な混同が彼の魂の中で起こった」(Ⅰ11:319) のは，彼が明らかに伯爵の性的な力に影響されたからである。それゆえ彼はシャルロッテへの「この謎めいた訪問を謎めいた説明で包んでしまう」(同:320)。エードゥアルトとシャルロッテは愛の対象をそれぞれ心秘かに求めながらも，自己の感覚的欲望を満たすために互いに交わる。それは心の理想と肉体の現実との奇妙な絡み合いである。

> 仄暗いランプの下でたちまち内なる愛情が，思い込みの力が現実的なものに対して権利を主張したのだ。エードゥアルトはオッティーリエだけを自分の両腕に抱いていた。シャルロッテの魂の前では遠く近くに大尉が浮かんでいた。そういうわけで実に奇妙なことだが，そこにいないものといるものとが魅力的にうっとりと入り乱れて絡み合ったのである。(同:321)

単に肉体的次元を有するに過ぎない性愛そのものはここでは問題ではない。確かに，「自然的必然と社会的形式が出会う」[17]結婚においてこのようなものは不可欠であろう。それは本来，個別的自我を相手に埋没させ，相手と一体化しようとすることによる愛の確認であり，性の根源的現実であることは否めない。しかしこの場合むしろ決定的なのは，エードゥアルト並びにシャルロッテが自分の理想を求めるこの想像上の姦通が結局のところ現実との安易な妥協としてなされることである。彼自身が後に「二重の姦通」(Ⅱ13:455) と呼ぶこの「前代未聞の出来事」[18]において，「もう一度オッティーリエの傍に行きたいという打ち勝ち難い欲望」(Ⅰ11:319) を具現するための代償として，シャルロッテの存在は彼の役に立つに過ぎない。彼女にとってもエードゥアルトはあくまでも大尉の代償物である。この意味で彼等は性愛の協力者というよりもむしろ共犯者なのである。それは自然が彼等に許した行為ではなく，決して許されない「ひとつの犯罪」である。それゆえその夜が明けたエードゥアルトの後ろめたい感情に関して次のように述べられている。

> …次の朝妻の胸元で目を覚ました時，エードゥアルトには朝が予感に満ちて覗き込んでいるように思われたし，太陽がひとつの犯罪を照らしているように思われた。(同:321)

この姦通によってエードゥアルトとシャルロッテは各自の真の欲求を初めて知るのである。彼はオッティーリエをあくまでも純粋無垢な存在として崇めている。従って彼は自己自身を純化しなければならない。というのはオッティーリエへの彼の愛に肉体的欲望を混入させることは彼女の純潔を深く傷つけることを意味するからである。彼が彼女の前で純粋であろうとするなら，彼の感覚的欲望は現前してはならない。彼はそれを予め他のところで満足させなければならない。それが恐らくエードゥアルトにとっての姦通を意味するのだろう。まさにそのことによって彼は彼女への愛の無償性を保証しようとするのである。まだ彼女は感覚的欲望の対象ではなく，彼によって精神的愛の不可欠の対象として聖化されている。

エードゥアルトにしばしば異を唱えて彼の激しい気性を逆撫でしがちなシャルロッテとは反対に，オッティーリエは自己を声高に主張することもなく，日常的営為を通じて彼に従い同化することによって，彼にとって「やさしい守護神」(Ⅰ７:289) となって行く。彼女はゲーテが敢えて地上に呼び寄せた聖女であるがゆえに，読者に強い印象を与える存在である[19]。ゲーテは彼女に沈黙と食物の節制を聖女の属性として付与する。このことは彼女が肉体的精神的重みから自由であることを暗示している。水車小屋の散策の途上のオッティーリエは，エードゥアルトにとって「自分の上を浮遊する天上の存在」(Ⅰ７:291) となっている。彼が彼女

の筆跡と自分のそれとの驚くべき一致を発見した時の彼等の抱擁は彼等の愛の最初の確認であり，そこには性愛的なものの痕跡は何ら見出されない。この瞬間彼は彼女の精神の純粋な高みへと飛翔し得るのである。

> 「君は僕を愛してくれている！」彼は声を上げた。「オッティーリエ，君は僕を愛してくれている！」そして二人は抱き合っていた。どちらが先に相手を抱いたのか，判定することはできなかったであろう。この瞬間から以後，世界はエードゥアルトにとって一変した。彼はもはや以前の彼ではなく，世界はもはや以前の世界ではなかった。(Ⅰ12:324)

彼等への親和力の作用が強ければ強いほど，彼等の愛は自然力によって強く支配されている。自然もまた時間の推移と共に円環を閉じて一度死ななければならないように，彼等の愛も読者に避け難い別離を予感させる[20]。エードゥアルトが池の傍にプラタナスを植えた日にオッティーリエが生まれたことは単なる偶然ではなく，作者の用意周到な意図と見做さなければならない。添え状の中で寄宿学校の助手は彼女を「最初は固く閉ざされているが芯のしっかりした本物の果実，早晩美しい生へと成長する果実」(Ⅰ３:264) と比較しているが，それは比喩以上のものと評価してよい。オッティーリエは聖女であるのと同時に自然が生み出した美しい花でもある。日記の中に彼女は助手の言葉をこう書き留めている。

> 私達の回りに花を咲かせ緑を茂らせ果実を実らせる樹木とも，私達が通りすがるどんな草叢とも，散策の折りに踏むどんな草の茎とも，私達は真の関係を持っている。それらは本当に私達と同郷のもの達なのだ。(Ⅱ７:416)

オッティーリエは植物と内的な関係を持っている。自然，とくに植物的自然は彼女の本性に根差したものであり，彼女の内なる自然は外的な自然の中に置かれた時，互いに呼応し調和を見出し合う。ゲーテは彼女にこのような自然との深い類縁性を与えることによって，自然との類縁性を忘却し自然を人工的に秩序付けようとする――シャルロッテがその代表である――近代理性の立場とその限界に対して鋭く批判の眼差しを向けている。そのことは，人間は自然から生まれつつも自然を忘れることなく精神的なものに目覚め，更に神的なものへと成長するという有機的な法則性が人間には元々内在するのだ，というゲーテの確固たる信念に基づいている。

前述した〈デモーニッシュなもの〉は『ファウスト』における「世界と行為の精霊」[21]としての地霊の姿に最も明確に表現されており，神の絶対的意志をこの世で具現する使命を持っている。そこでは〈デモーニッシュなもの〉は「誕生と死」[22]の，創造的要素と破壊的要素の両極性を包摂している。しかし一方の要素のみが人間の全人格を支配する時，その者は〈デモーニッシュなもの〉に取り憑かれた人間となる。それはまさしくエードゥアルトの姿においてとりわけ明瞭に具現されている。

> エードゥアルトの心の持ち方にも行動にも節度はもはや存在しない。愛し愛されているという意識が彼を果てしなく駆り立てる。全ての部屋，全ての回りのものの景色が彼には何と一変してしまったことか。彼はもはや自分自身の家にいるのではない。オッティーリエの現前が彼の全てを呑み込むのだ。彼は彼女に没入し切っている。それ以外のどんな考察も彼の頭に思い浮かんではこない。どんな良心も彼に語り掛けてはこない。彼の本性の中に押さえられていた全てのものが迸しり出てくる。彼の全存在がオッティーリエに向かって流れて行くのだ。(Ⅰ13:328)

エードゥアルトにおける〈デモーニッシュなもの〉は人間に内在し，しかもその支配に屈しようとしない運命的な自然力である。この力が外在化されてオッティーリエに大きな影響を及ぼす時，それは殆ど人間の意志を越える超人格的な運命となる。彼の内部で働く〈デモーニッシュなもの〉は，プロメテウスが根拠のある自己主張を押し進めて神に対して激しい抵抗を示す際の原動力ではない。エードゥアルトは〈デモーニッシュなもの〉の手助けで自己を形成する強い人間ではなく，あくまでも〈デモーニッシュなもの〉に翻弄される無力な人間である。オッティーリエはそれに反して後に内省的な態度を獲得する。つまり彼女は〈デモーニッシュなもの〉を直観してそれを客観的に対象化し，更にはそれを超越して行くのである。

> オッティーリエは無垢の感情に支えられており，この上なく望ましい幸福への途上にあって，エードゥアルトのためにだけ生きている。彼への愛によってあらゆる良きことを進んで行ない，彼によってその行為が一層楽しくなり，他の人々に対して一層心を開いた彼女は，気がついてみると地上の

天国にいるのである。(同:331-2)

このように彼女はエードゥアルトによって彼の中で初めて愛と生を見出す。彼女にとって愛することは生きることであり，生きることは愛することである。愛と生は彼女にとってもはや切り離せない関係にある。彼女の感情が彼女本来の有機的発展と一致するがゆえに，何ものも彼女の愛の行く手を妨げることはできない。エードゥアルトはミットラーに対して自己の心情を吐露している。

「いや，僕はまだ一度も愛したことがなかったのだ。今ようやく僕は，それがどういうことなのかを思い知った。今まで僕の生活の全ては，ほんの序曲，ほんの引き伸ばし，ほんの暇つぶし，時間の空費に過ぎなかったんだ。彼女と知り合って彼女を愛する，しかもまるごと本当の意味で愛するまではね」(Ⅰ18:354-5)

このようにエードゥアルトもまたオッティーリエへの愛において初めて自己の存在の確証を見出したように思われる。しかしこの存在が彼女に強く収斂すればするほど，彼は，他者に対してより開かれた存在となった彼女とは反対に，以前にもまして一面的そして閉鎖的となって行く。彼は彼女以外の全ての人間を自己の意識から放逐し，自己の空想の中で彼女の存在に喚起されて，彼女の美と愛を見る。それとともに彼女は情念を規制する理性を喪失した彼の精神的盲目性のための守護神となり，彼の今後の運命を支配し始めるのである。

大尉が職業的使命を見出して館を去ったがゆえに，シャルロッテは大尉を断念せざるを得ないと同時に，自分とエードゥアルトは再び昔の安定した状態に戻ることができると思い込む。このために彼女はオッティーリエを館から遠ざけようとする。ここにおいて彼女はしかし愛の本質を誤解している。愛が主要人物達の間に設ける条件は，大尉が親和力の説明に際して主張したように，不可逆なものである。オッティーリエに対してのみ存在するエードゥアルトの愛を取り戻すことはもはや不可能である。にもかかわらず彼女は彼に平然とこう言ってのける。「私達を仲たがいさせ，私から夫を，夫の子供達から父親を奪っておいて，オッティーリエは幸福になれるものなのかしら」(Ⅰ16:342)。この問い掛けは彼女の本質の限界を露呈している。彼女は愛を人間と人間との真の結合の次元ではなく，結婚制度という社会的規範の狭い枠の中でのみ理解し，相手を家庭の中で果たす役割にのみ固定化しようとする。それは確かに彼女自身の利害からのみならず，脆弱な時代に彼女なりの倫理的秩序を打ち立てようとする根拠ある意図から発したものであるが，彼女の言葉は，既に夫の役割を放棄しているエードゥアルトにとってはもはや何の意味も持たない。とはいえ彼もまたこの閉塞状況を突破する道を自分から見出すことはできないのである。

「でもこれだけは言えるよ。ある事柄をどうしたらよいのかを正確に言えない時こそ，未来が僕達に何を教えてくれるのか，じっと待つことにするのが一番だということだ」(同)

二人とも，時間が何をもたらすかを待ち受けてみることを決意する。このような決意はしかしその名に値しない。作者は語り手にエードゥアルトとシャルロッテの間の疎隔を間接的に物語らせることによって，彼等の関係の決定的な決裂を描き出している。二人とももはや互いへの信頼を持たない。支配するのはただ飽くなき自己の意志の優位だけである。彼女は真の意味で現実を直視せず，それを回避しようとし，彼は現実から逃避しようとする。二人はこんな風にして自分達の回復困難な関係を何とか秩序付け得るのだと思い込んでいる。館から逃れるエードゥアルトの決意は，オッティーリエがシャルロッテと館に留まるという条件の下で辛うじて成立する妥協である。

「あなたが恋人として手に汗握るような思いでご自分の妻を訪れて無理にも引き寄せて下さり，妻を恋人として花嫁として両腕にお抱きになったあの夜の幾時かを思い出して下さい。あの奇妙な偶然を天の摂理として崇めようではありませんか。私達の生の幸福が崩れて消え去りそうになる瞬間に，あの偶然が私達の関係の新たな絆を配慮してくれたのですから」(Ⅰ18:358-9)

現実は差し当りシャルロッテに味方しているかに見える。彼女は自分の懐妊をエードゥアルトと再び結合する「新たな絆」と見做し，それが当面の危機を避けてくれるだろうと期待するが，そのことはしかしあくまでも「妄想」(Ⅰ13:329) に過ぎない。エードゥアルトの思いは別の方向に向かい始めている。

エードゥアルトは内的な危険と均衡を保つため，外的な危険に憧れた。生活が耐え難いものとなり

> かけていたので，彼は破滅に憧れた。いやそれどころか，自分がもはや存在しなくなるのだ，そしてまさしくそれゆえに愛する人々や友人達を幸福にすることができるのだ，と考えることは彼にとって一つの慰めであった。(Ⅰ18:359)

現実はエードゥアルトに妻の懐妊という避け難い事実を突きつけ，彼に決断を迫る。優柔不断にも彼は，愛の葛藤を逃れるために，死が確実であろう戦場へ赴く。しかしそれが真の解決でないことは明白である。戦場で死が彼に必ず保証されているわけではない。というのは戦争の世界は，動物的自然に支配される彼が充分に本領を発揮する世界であり，日常から遠く隔たっているからである。彼が死に遭遇せず無傷のまま帰還することは大いに可能なことである。しかしむしろ戦うべきは日常の現実においてではないだろうか。人物達はなるほど心の奥深くに「大きな運命の種」(Ⅱ3:371)を宿している。彼等がここから読み取ることのできる運命は，彼等の希望に添う明るい未来を依然として許しているように見える。しかし差し当り彼等はいわば未決定の状態に，判断停止の状態に留まる。それはまるで，「至るところに割り込んできては邪魔をする結果，なるほど全体としては前に進んではいるものの，とてもゆっくりと進んで行く遅延させる悪魔」[23]が支配しているかに思われるのである。

Ⅳ　オッティーリエの愛と生

ゲーテが理解する〈デモーニッシュなもの〉は，例えばソクラテスがその声に耳を傾けたデーモンのような良心の内なる声ではなく，本来的に善悪の彼岸に立っており，倫理的秩序を超越している[1]。しかし〈デモーニッシュなもの〉に取り憑かれた人間が倫理的秩序と接触を持たないことは殆ど不可能である。というのは人間は誰しも生を受けている限り，他の人間との共存から解放されることはできないからである。

> あの〈デモーニッシュなもの〉はあらゆる有形無形のものの中に顕現し得るどころか，動物の下で極めて顕著に現われるけれど，とりわけ人間とは最も不思議な連関を持っており，道徳的世界秩序と対立しないまでも，それと交錯するひとつの威力を形成する。それゆえ一方を縦糸，他方を横糸と見做すことができる[2]。

個人にとって自明なことは社会にとって絶対的に自明であるわけではない。社会は，それ自身の規範にとって自明でないことを全て許し難いこととして断罪する。人が迷わず自己の道を行く時，社会は介入して彼を抑圧しようとする。その時彼は何らかの形で社会と戦わざるを得ない。ある人間の中に潜む〈デモーニッシュなもの〉が，客観的に存在する倫理的秩序と一致しない時，彼はその秩序と戦わざるを得ない。彼の心の中で〈デモーニッシュなもの〉と倫理的秩序との戦いが決着をつけられるのである。ゲーテはエードゥアルトによって〈デモーニッシュなもの〉がもたらされたオッティーリエの姿の中に，この対決を極めて深く自覚する人間を描いている。四人の主要人物達が小説第一部の中心にいるとすれば，第二部の中心にいるのはまさしくオッティーリエである。他の人物達が引き起こす行為や事件は全て彼女と何らかの関係を持っている。教会，礼拝堂，墓地，古代ペルシアの王マウゾルスの墓碑のスケッチ，その妃アルテミジアの葬送行進曲，客達の活人画などは，彼女の孤独を深め彼女の聖化を高める不可欠な手段であり，彼女がやがて静かに迎えることになる死の象徴的表現である。シャルロッテが大きな庭園で本領を発揮するとすれば，オッティーリエが本領を発揮するのはとくに教会堂においてである。建築家が教会を「いわば過去に向かって成長」(Ⅱ2:367) させて行き，「人間存在の永続」(Ⅱ1:363-4) を芸術によって成し遂げようとすることによって，その植物的自然が彼の芸術の対象となるオッティーリエ自身もまた，時間の流れを遡って行き，聖女の趣きを具象的に獲得する。そして彼女に対する建築家の秘かな思慕が，教会堂として結晶化されることは，自然に対する芸術の補完であるとともに，彼女を教会に封じ込めることをも同時に意味する。それは彼女がやがて迎える死の予兆に他ならない。建築家を始めとする様々な人間達との出会いは，彼女がどれほど深くエードゥアルトを愛しているかを改めて認識させる契機でもある。彼女には一切の事物が彼と何らかの関係を持っていることを示唆しているように思われるのである。

> …彼女の心の中にもはや余地はなかった。そこはエードゥアルトへの愛によって全く立錐の余地なく満たされていた。そして全てを貫き通す神性だけがこの心を彼と共有することができたのである。(Ⅱ5:390)

「神性」への言及は，オッティーリエを地上に呼び寄せた作者の願望の表現である。彼女自身にはしかしこの神性についてまだはっきりとした自覚はない。彼女

はまず「黄金時代」と「楽園」の喪失を受け入れなければならなず，幾多の試練を経て初めて神性を自覚することができるのである[3]。彼女が今最も身近に感じているのは，植物的自然，つまりエードゥアルトが彼女の誕生日に植樹して彼女に彼を想い起させるプラタナス，そして彼が世話をして来たがゆえに彼女が熱心に世話をしている庭園や温室などである。ここにはゲーテ固有の世界観が包含されている。自然なものに拘泥することは一般に罪であるがゆえに，人はそれから離れて，神的なものへ近づく。神と自然のこのような二元的分離はキリスト教の根本思想である。しかしゲーテは自然を忘却してただ理性にのみ至高の価値を置く人間を断罪する。彼は「至るところに唯一の自然が存在する」[4]こと，神性が一切を貫いており自然が「神的器官」[5]ですらあることを確信している。自然との深い共属関係を感じることによって，人間はまさに神的なものへと高まる。それは，人間は自然を通して初めて神性と結合し得るという確信のうちに人間の生の倫理的意味を見出そうとする，神と自然に寄せる一見逆説的なゲーテの信念である。彼はオッティーリエの中にこの信念を生きた形で表現する。従ってオッティーリエの姿を更に考察することが小説の核心にまで至る道であると言えよう。

＊

シャルロッテが生んだ子供は二重の類似性，即ちオッティーリエを思い起させる二つの黒い貫くような眼と，大尉に似た顔と姿を持っている。子供には想像上の姦通の罪が体現されている。本来不可能なことがあり得たがゆえに，自然が祝福を授けなかったその子供は死ぬべく運命付けられている。子供はいわば死ぬために生まれて来たのだ。その前兆は子供の洗礼の際の老牧師の死に既に現われている。ミットラーが引き起こし，オッティーリエを大いに動揺させるこの不幸な出来事は，彼女にとってもまた自らの死に関わる重要な契機である。

> これほど直接に誕生と死，棺と揺り籠が並び合うのを目にして考えること，つまりこの恐ろしい対立を想像の力だけでなく，目も使って総合することは，回りに立っている人々にとって難しい課題であった。思いがけなく提起されただけに，なおさら難しかったのだ。オッティーリエだけは永眠した人[老牧師]が相変わらずやさしい温和な顔をしているのを観察して，一種の羨ましさを感じた。彼女の魂の生は断たれていた。どうして肉体がなお保持されてよいものだろうか。(Ⅱ8:422)

この考察はしかし死へのオッティーリエの憧憬を表現しているに過ぎず，死への決意はまだ生じてはいない。そのことを示しているのは，彼女がその直後に見る夢である。

> 不思議な夜の幻が彼女を慰めてくれた。それは彼女に愛する人の存在を保証してくれ，彼女自身の存在を確固たるものとし活気づけてくれる幻であった。…そして落ち着いた一夜が明けて朝に目覚めると，彼女は爽やかで慰められた気持ちになっていた。エードゥアルトはまだ生きている，自分はまだ彼とこの上なく密接な関係にある，という確信を彼女は感じた。(同:422)

夢は無意識なるものの世界である。〈デモーニッシュなもの〉は無意識なるものの状態に影響を及ぼす，とゲーテは語っている[6]。自己の最も内的な本性が顕わとなる夢の中で，エードゥアルトがまだ生きていることをオッティーリエが幻想するのは，彼女が彼の〈デモーニッシュなもの〉によってあくまでも強く捉えられていることを示唆している。彼女は，自分がこの世で彼と結ばれ得るであろうという希望を依然として放棄してはいない。

> エードゥアルトがとくに好んだもの全てがまた最も強く彼女の心遣いを呼んだのは考えられることである。いやそれどころか，彼自身が間もなく戻ってくること，今はいないこの男のために見せた思いやりのあるまめまめしさをその彼が目のあたりに認めて感謝してくれることを，どうして彼女は期待してはいけないのだろうか。(Ⅱ9:425)

オッティーリエは子供を腕に抱えて自然の中を彷徨する時，子供が「新たな楽しい結合」(同) を固めてくれることを願い，次の結論に達する。

> この晴れた空の下で，この明るい陽光を浴びながら彼女は突然，自分の愛が完成されるためには，それは完全に無私なるものにならなければならないのだ，と悟った。(同)

この洞察は一見唐突で非論理的な飛躍に走っているかに見える。しかしオッティーリエにとってはそうではない。彼女の思考はその肉体の発達と同様に有機的にしか発展することのできないものであり，階梯を飛ば

すことは決してできない。しかもその思考は常に彼女の存在そのものに深く根差しており遊離することはない。有機的に成長する恵み深い春の自然の中で，彼女は子供を同じく有機的に成長する存在と見做している。そのことによって彼女は両親と子供の永遠の調和的な関係を自然との有機的関係において直観的に，つまり自己自身の存在の深みに即した内面的認識によって把握するのである。この調和的関係を否定することは彼女にとっては，自身の自然との共属関係を崩壊させることをも意味する。従って少なくともこの世でエードゥアルトを断念することはオッティーリエにとって必然的なことなのである。彼女は，頑なに自己を主張し人間を社会の中で占める役割意識でのみ捉えようとするシャルロッテよりも遥かに高次な次元に立っている。彼女の最後の日記にはこう記されている。

> 同種の中の完全なものは全てその種を超えなければならない。それは比類ない別のものとならなければならない。幾多の音調の点で小夜啼鳥はまだ鳥である。次いでそれは自己の種属を乗り越えて，一羽一羽の鳥に対して，そもそも歌うとはどういうことなのかを暗示しようとしているように見える。(Ⅱ９:427)

オッティーリエがこの理想を体現し，人類という類概念を超えて個別的な人間の生の可能性を究める自律的存在へと更に発展することは後に示される[7)]。

「家庭的な歩みの穏やかさ」(Ⅱ５:388) を守るオッティーリエと真の対照をなすのは，子供っぽい荒々しさを持つルツィアーネではなく，ノヴェレの中の少女である。彼女は「反抗の形を取った，激しい，いわば先天的な愛情」(Ⅱ10:437) がもたらす憎悪の感情を真の愛へと変貌させる。

> かつて憎んでいて今は激しく愛しているこの男の無関心を罰するために，そして彼を自分のものとしてはならない以上，せめて彼の想像の力と後悔とに永遠に結ばれるために，彼女は死のうと決意した。(同:438)

少女は自己の生命を犠牲にして水の中に飛び込む。まさにそのことによって彼女は死から生への再生を果たすと同時に愛の再生をも獲得する。水はここでは「その正体を知っており，取扱う術を心得ている者にとっては親しみの持てる元素」(同:439-40) となっている。ノヴェレの恋人達は自己の生命を賭けることによって，自らに降り掛かる様々な困難と運命を克服することができた。小説の主要人物達は概ね自己の運命に従うか，あるいは辛うじて回避し得るだけである。この時点ではオッティーリエでさえも，自己の運命はシャルロッテによって決定されなければならないと考えている。人物達は現在の状況の下では，幸も不幸もない曖昧な状態に陥っているように見える。そのことを語り手は暗示的に伝えている。

> 幸運なことに人間はある程度の不幸しか理解することができない。それを超えたものは彼を滅ぼすか，無関心なままにさせておくかどちらかである。恐れと希望がひとつになって，互いに打ち消し合い漠然とした無感覚に陥る，そういう心境があるものだ。(Ⅱ４:376)

この「漠然とした無感覚」を突破するオッティーリエにとっての重要な契機は，湖畔でのエードゥアルトとの出会いと，その直後に起こる子供の溺死である。それは，未来に対するこれまでの楽観的な予測や様々な出来事に対する恣意的な解釈を全て根底から覆す小説の決定的な転回点となるのである。

> 「僕は君の命令に従うよ」エードゥアルトは声を上げて，まず情熱を込めて彼女を見つめ，次いでしっかりと両腕に抱き締めた。彼女も彼を両腕で抱き締め，この上なく愛情を込めて自分の胸に押し当てた。希望が空から落ちてくる星のように，彼等の頭上を掠め去った。彼等は互いにひとつに結ばれたと思い込み，信じた。彼等は初めて思い切ったこだわりの無い口づけを交わして，無理にも苦しい思いで別れた。(Ⅱ13:456)

エードゥアルトは戦場で自らの運命を試し無償で帰還し得たことによって，征服者へと変貌している。オッティーリエこそは彼がそれを求めて戦ってきた掛け替えのない恩賞であり，彼は戦争で自己本来の生命力を発見した。湖畔での出会いはオッティーリエに自分が彼の〈デモーニッシュ〉な本性にいかに強く捉われているかを改めて明確にした。彼を断念するという，彼女が再会以前にした決意は，彼が不在の時の恵み深い自然の中でなされたものである。情熱に満ちた抱擁によって彼女は初めてその高みから転落し，彼女の肉体は強ばってしまい，彼女は罪あるものとなる。「肉体の強ばり」は子供に死をもたらす根本的な原因である。ここにおいて，「不実な制御し難い元素」(同:457)，即

ち死を引き起こす水の上で――ノヴェレの中の水とは反対に――罪ある女が子供を腕に抱いて湖に漂う時，彼女をかつて軽やかに浮遊させた水は，恐ろしい力に変貌し，彼女から子供を力ずくで奪い去る。子供は愛と結婚に対して二重の姦通を犯した罪ある人々の無実な犠牲である。この犠牲はオッティーリエの中に罪の意識を初めて覚醒させる。彼女が自身の死でこの罪を償う他はないことは，次の言葉が示唆している。

> 初めて彼女は生きているものを清らかであらわな胸に押し当てる。ああ，しかしそれは生きたものではないのだ。不幸な子供の冷たくなった四肢は彼女の胸を心の奥底まで冷たくする。(同)

子供を蘇生させようとするオッティーリエの絶望的な努力は同時に，自らが転落した高みへ回帰しようとする困難な戦いでもある。しかしその努力は無駄である。かつてクリスマスの夜に彼女は，子供を腕に抱えた女，即ち「全く果てしの無い光明に包まれる」(Ⅱ6:405)「聖母」(同:403) の役を演じたことがある。自分を常に自然の存在とのみ見做してくれた寄宿学校の助手の声を聞いたように思った時，彼女は自分が演じた姿が実のところ仮象でしかないことを既におぼろげながら気づいていた。彼女は今こそ自分が実際罪あるものであることを悟るのである。そして最大の試練に曝された決定的瞬間に，彼女は天に向かって祈ることによって，神的なものへの道を歩み始める。その神的なものは自然の力を通して，つまり「一陣の穏やかな風」(Ⅱ13:458) を通して顕現される。小さな遺骸を抱き締める自己自身の肉体は死によって既に刻印されているが，そのことを彼女自身はまだ気づいてはいない。

「予感に満ちた宿命の最初の犠牲」(Ⅱ15:464) であり，ノヴェレとは反対に小説の過程を生から死へとはっきり変貌させる子供の死は，その母シャルロッテにとっても運命の刻印である。人間は自己の行為を自由に選択し得ると思い込んでいるが，その選択の根底には，必然的にその選択に至る「目に見えない力」が存在する[8]。この可能性は決して排除されない。運命を回避するために人が企てる行為そのものが却ってこの運命をもたらすのである。彼女が個人的な生活領域を確保することによって自己の倫理的立場を主張し得ると思い込んだことは，実のところ自己欺瞞に過ぎなかった。それに留まらず既に子供の持つ二重の類似性は，大尉が彼女の仕事の虚構性を指摘したのと同様に，情念に対する彼女の理性の優位の虚構性を露呈しているのである。

> 「私は離婚に同意します。本当ならもっと早くにその決心をすればよかったのですけれど。ためらったり抵抗したりしたために，私が子供を殺してしまったのです。この世には運命が執拗に目論んでいることもあります。理性だとか美徳だとか義務だとか，あらゆる神聖なものが運命の行く手を妨げようとしても無駄なことなのです。運命に好都合なこと，私達に好都合とは思われないことが起こることになるのです。そういうわけで私達がどんな振舞いをしようとも，結局のところ運命が断固たる行動に出るのです」(Ⅱ14:460)

今ようやくシャルロッテは自己の立場の正当性を主張することも安定した生活を願うことも断念し，「自分にとってこれほど大切なひと組が結び合うのを目にする静かな希望」(Ⅱ15:464) を育むに至る。子供の犠牲によって初めて可能とはなるが，自由意志から発したものではない彼女の断念は，同時に彼女の理性の限界を示している。なるほど彼女の高貴さは情熱に対する勝利を可能にはするが，悪意を持った運命に対しては無力である。それに対してオッティーリエはシャルロッテよりも高い境地に到達している。

> 彼女は以前の制約や従属から解放されていた。後悔の念や決意によってあの過ちの重荷，あの悲運の重荷から解放されたと感じた。彼女はもはやどんな力にも支配される必要はなかった。彼女は心の奥底で，完全なる断念という条件の下にのみ自分を許していた。そしてこの条件は未来永劫に亙って不可欠なものであった。(同)

オッティーリエの諦念はエードゥアルトへの愛そのものの断念ではなくて，この世における愛の実現の断念である。彼女が彼を依然として深く愛していることは否定し得ない。そして彼女は教育者として生き，現世の幸福を放棄する決意をする。

> 「あの方［寄宿学校の助手］なら私を神に捧げられた者と見做して下さることでしょう。その者とは，目には見えずに私達を取り巻いてくれ，恐ろしい執拗な力に対して私達を独りで守ってくれる神聖なるものに身を捧げることによってのみ，恐ろしい災いを自分のためにも他の人々のためにも償うことができるかも知れない者のことなのです」(同:467-8)

しかしこの世における愛の成就を断念し，教育者として生きる単なる倫理上の決意だけでは，オッティーリエは「恐ろしい執拗な力」の行使を防ぐことはできない。大尉のように職業的使命を選びこれを満たすことによって，困難な状況を克服しようとすることは理性的な立場に過ぎない。既に大尉の場合において示されたように，この立場だけではもはや十分なものではない。作者は人間を支配する自然法則の優越を執拗に主張する。それはエードゥアルトの部下である兵士の家での彼とオッティーリエの出会いに象徴的に示されている。彼は彼女に不意に出会うことを避けるにもかかわらず，結局は彼女と再会せざるを得ない窮地に陥る。もはや再会しないという二人の決意は，彼の背後で閉まる小部屋の戸によって無残にも挫かれてしまう。親和力はここではもはや単なる「偶然」(Ⅱ16:473) ではなく，二人の生を圧倒的に支配する運命的な自然必然性である。それは「時間を収縮し空間を拡大する」〈デモーニッシュなもの〉と一致する。この世における恋人達の共属関係は絶対的なものであり，彼等が生きている限り別離はあり得ない。この必然的な力に直面するオッティーリエは，自分が生き続けるなら，自己の使命を決して果たし得ないことを自覚する。彼女は既成の倫理が要求する理性的な立場を越えて成長し，畏敬の念をもって「高次な手」[9]に身を委ねる。もちろんそのためには彼女が運命の絶対性を無条件に認めるのではなく，自己の自発的な決意をすることが前提とならなければならないのである。

これ以後彼女が自らに課する自発的な寡黙さはますます募り，殆ど完全な沈黙と化す。言葉無き者は言語の無効性とその沈黙の重みを知っている。彼女の沈黙は深い内的葛藤の果てにある明澄な意識の顕われである。彼女の決意は言語によってではなく，秘かな行為によって行なわれる。食物摂取の断念は彼女の死の準備を意味する。恐らく人が最も崇高な形で自己の存在を認識するのは，死に隷属することから自己を解放して，冷静に死を迎えることによってであろう。自由意志から発する死は運命の連鎖を断ち切り，新たな高次の生を開示して行く。オッティーリエの最終的な決意は友人達に宛てた手紙の中で明かされている。

> 愛する方々，自明のことをはっきり言えと，なぜ私におっしゃるのでしょうか。私は自分の進むべき道から外れてしまいました。そして再びそこに戻るわけには行かないのです。私を支配してしまった，敵意に満ちた魔神が外から私の邪魔をしているように思われます。たとえ私が自分自身と再び一体感を見出したとしても。…私の内部のことは私自身にお任せ下さい。(Ⅱ17:476-7)

ゲーテが「陰欝で情熱的な必然」[10]と名付けたものをオッティーリエ自身が「敵意に満ちた魔神」と呼ぶことは，彼女が既にそれを客観的に対象化して把握し，再びある高みを獲得したことを意味していると言えよう[11]。この命名行為によって彼女は超人格的な混沌としたものを克服する。なるほど彼女もまた他の主要人物達と同じように最後までこの超人格的な諸力の世界の支配下にある。しかし彼女が彼等と明確に区別されるところは，彼女が最後にこの事実を冷静に認識することができたという点にある。そしてこのことが彼女にとっては単なる自然的存在から，真の倫理的精神的人格への成長の決定的な契機となり，彼女が到達した高みはエードゥアルトに深い影響を与えることができるのである。

> 「彼女はもう僕から遠く離れているじゃないか。彼女の手を握ったり，彼女を胸に抱くなんて僕には思いもつかない。それどころかこんなことを考えてはいけないのだ。身震いのすることだ。彼女は僕から遠く離れて行ったのではなく，僕より高いところへ行ってしまったのだ」(同:477-8)

ゲーテは親和力の最後の残照をとりわけ印象深く描き出している。

> 相変わらず二人は魔術的と言ってよいほどの名状し難い牽引力を及ぼし合っていた。二人はひとつ屋根の下に住んでいた。しかしとりたてて互いのことを思い合わなくとも，他のことに取り組んでいても，仲間にあちらこちら引っ張り回されても，二人は互いに近づいて行った。同じ広間にいると分かれば，ほどなく二人は隣り合って立つか座るかしていた。この上もなく近くに寄り添っている時だけ，二人は安心することが，すっかり安心することができた。こんな風に寄り添っているだけで充分だった。眼差しも言葉も，身振りも触れ合いも要らなかった。純粋に一緒に居ることだけが必要だった。そんな時それは二人の人間ではなく，無意識のうちにすっかりくつろいで自己自身と世界に満足しているただ一人の人間だった。…生は彼等にとって，二人一緒でなければ解けない謎だったのだ。(同:478)

これはゲーテがこの小説で恋人達に対するその作用を描いたものの中でも，最も完全な親和力の表現であろう。二人がこの世で達成し得るものは，愛における言葉無き〈二人きりの状態　Zweisamkeit〉であり，「至福の必然」(同) である。それはまた天上で彼等に約束される永遠の合一の先取りをも意味している。愛の頂点において彼等が死に断罪されているのは，この世で結合し得る希望が既に存在しないためである。断罪の外的契機をなすのはモーゼの十戒に関するミットラーの場違いな演説である。なるほど「汝，姦淫することなかれ」(Ⅱ18:482) という第六の戒律についての彼の見解がオッティーリエの心に止めを刺すことは否めない[12]。しかし彼女が死を選ぶのは，運命的な愛と諦念，〈デモーニッシュ〉な必然とこの世における自己の自律的な自由との絶望的矛盾を解消するためである。自由と掟という二つの相反する異なった性質を持つものを，はっきり二分したり，あるいはどちらか一方の領域に人間を限定してしまうことなく，これら二つの対立の間に人間の意味深い現実を見出し，より高次な緊張関係の中に人間を置くという考えは，ゲーテに特徴的な〈両極性〉の概念に明らかに基づいている。ゲーテはかつてリーマーとの対話で次のようにこの小説を説明した[13]。

> このような表現においては常に，感覚的なものが支配せざるを得ないが，これは運命によって，つまり自己の自由を死によって守る倫理的本性によって罰せられる他ないものだ。…その時初めて倫理的なものが自己の勝利を祝うのだ。

人間精神が自然力によって支配され，殆ど解体の危機に曝される時初めて，主体的自由の可能性が言葉の真の意味で生じる。その契機がただ自由意志の中でのみ見出され得る主体的行為とは，自己の責任を他者に決して転嫁しようとしない精神の働きを意味するものである。主体性を欠く行為に感動はないであろう。オッティーリエの行為は彼女の決定的主体性ゆえに読者を感動させることができたと言ってよい。彼女の死は自己の運命に対する贖いであると同時に他の罪ある人々のための贖いでもある。ゲーテは一切の罪を引き受けて死を選ぶ責任感情を「倫理的本性」と呼んだ。オッティーリエは自らを犠牲にして死に，他者の中で生き続けることによって現世の愛を超越する。彼女はそれによって感覚的なものを克服しようとするのではない。彼女にはむしろ神的なものに，即ち感覚的なものそのものが依拠する根底に帰依することが重要なのである。それとともに彼女は他の人々に倫理性を覚醒させる。つまり彼女は希薄化した倫理性の時代において自然に根差した有機的生命力を回復しようとするのである。それゆえベンヤミンが言うように，彼女は「自由意志による死にもかかわらず殉教者として」[14]死んで行くのである。彼女がそれをなし得るのは，侍女ナニィが言うように，彼女は確かにこの世において可能な限り「自分のなすべきことをして苦しんだ」(Ⅱ18:487) からである。そして自由意志による死への選択を行うオッティーリエのこの姿において，ゲーテは〈執我〉から〈脱自〉[15]への〈高昇〉[16]の理念を具現する。人間はこうして運命的なものを超えて可能な限り真の自由に到達することができるのである。

小説が恋人達の死とともに終りを迎えるにもかかわらず，その結末は読者に意外なほど晴れやかな印象を与えている。生き残った者達――特にシャルロッテと大尉――が希望に満ちた未来を持たず孤独の中に取り残される一方，死んで行く恋人達には明るい未来が約束されているかのようである。作者は恋人達を寛大に取扱っている。小説の結末において互いに並び合って安らう恋人達を丸天井から見下ろす晴れやかな天使像のひとつは，建築家が以前描いたオッティーリエ自身の姿に他ならない。のみならず礼拝堂内の天井と床の間には彼女自身がかつて描いた花と果物の飾り模様が配置されている。天上から見下ろす天使の一人と，アスターの花冠を頭に被ってこの地上で永眠する女性が同一のオッティーリエであること――この完全なる一致はまさしく，神と自然との合一に寄せるゲーテの一元論的な信念の表明である。結末のこの晴れやかさは象徴的に，ゲーテが生涯抱き続けた不死性の信念とも重なり合いを見せている。かつてゲーテはこう語ったことがある[17]。

> 私達の永続性の確信は，私にとっては活動という概念から生まれてくるのだ。というのも私が生の終りまで休むことなく活動して，私の精神が現在の生存の形式ではこれ以上持ちこたえられない時には，自然は私に別の生存の形式を必ずや与えてくれるからだ。

この言葉にはゲーテの苦悩が，即ち人間存在の無常性を深く自覚するがゆえに永遠なるものに結び付こうとする深い苦悩が潜んでいる。神的なものに結び付こうとする人間の不死性が保証されるのは，「活動」しかも「人間に備わる最高のもの，最も優れたもの」(Ⅱ

７:407）である「高貴な行為」（同）によって，この小説に即して言えば，愛の中で生きること，生の中で愛することによってなのである。

> 多くの落ち窪んだ墓石や，参拝者達に踏み減らされた墓石や，自身の墓標の上に自ら崩折れた教会を目にしているといつも，死後の生はやはりもうひとつの生だという気がしてくる。人は肖像となり墓碑銘となってその生の中へ歩み入って，本来の生きた生の中よりも長くそこに留まるのだ。（Ⅱ２:370）

このように「高次な領域に生きて活動する」（Ⅱ18:488）オッティーリエの姿は，肖像となり墓碑銘となるのみならず，生き残った者の心の中に永遠に留まることであろう。そのように作者は望んでいるように見える[18]。そして実際，この願いを担い，死んで行くオッティーリエの生き方を継承する人物がこの小説の中に存在している。それはオッティーリエの遺体がもたらした奇蹟を通してこの世に生き返ったナニィである。彼女はもはや以前の無知で粗野な少女ではなく，「多くの真実と力を込めて，多くの好意と確信をもって」（同）あの建築家を慰めることができるほどに成長を遂げ，オッティーリエと同じ精神的高みに到達している。ここにおいて既に彼女は，かつてオッティーリエがこの世で望んで果たし得なかった教育者の役割を十分に果たしているのである。成長した彼女の姿は，なすべき使命をもはや持ち得ない堕落した貴族社会を中心とする時代に対する作者の鋭い批判であるとともに，生命力にあふれたナニィを典型とする人物が時代を担って行くだろうという未来の展望をも提示している。この意味においてオッティーリエはナニィとして既に蘇っているのである。

オッティーリエはその日記の中にこう記している。「人類の本来の研究対象は人間である」（Ⅱ７:417）。この言葉はまさしく人間という謎めいた存在に寄せるゲーテ自身の信念の告白である。この意味で彼がこの小説において〈親和力〉を手掛かりとして，人間存在における愛と生，倫理性の本質とその在り方を探求したのは，近代人が殆ど喪失したものと思われる人間と自然との有機的な関係を，混迷する時代の中に今再び回復するためであった。それゆえ，トーマス・マンが正当にも述べたように，この小説は「人間の心に関するかくも繊細で仮借のない知の作品」[19]と呼ぶことができよう――とりわけオッティーリエの愛と生の発展において。

註

Ⅰ

１）Vgl.Gonthier-Louis Fink:Goethes >Wahlverwandtschaften<. Romanstruktur und Zeitaspekte（1971）.In:Goethes Roman >Die Wahlverwandtschaften<.Hrsg.v.E.Rösch. Wege der Forschung（WdF）,Bd.CXⅢ.Darmstadt 1975.S.440.

２）ゲーテの作品の引用は次の版に拠っている。
Johann Wolfgang Goethe: Die Wahlverwandtschaften. Ein Roman.In:Goethes Werke,Hamburger Ausgabe（HA）, Bd.6.Hrsg.v.E.Trunz und B.von Wiese.Hamburg 1951, 7. Aufl.S.242-490.
例えば，（Ⅱ９:423）という略号は，第２部第９章423頁を示している。

３）Gespräch mit Riemer.Weimar,Dezember 1809.HA 6, S.622.

４）Vgl.Emil Staiger:Goethe.3 Bde.Bd.2.Zürich 1956. 4.Aufl. 1970.S.479.

５）Vgl.Arnim an Bettina Brentano.5.Nov.1809.HA 6, S. 642.
「ゲーテが第一部の前半においてあれほど見事に描き出した，仕事のない無為の幸福がもたらすこの退屈は，彼が色々と観察して私達の時代のある教養の高い田舎貴族の館の中に住まわせたものなのです。私はこの種の人間と何人も知合っていますが，彼等は皆，実に風変わりな心気症に苦しんでいます。彼等はどれほど多くの好意と現実を自己のうちに蓄積しようとも，自らの教養によって本物の農民の輪から隔てられたまま，倹しいスープを大抵は吹きこぼれるほど煮てしまうので，その結果鍋の中にはもはや何も残ってはいないのです。この階級におけるほど多くの離婚が見出されるところはどこにもありません」

６）Vgl.Karl Wilhelm Ferdinand Solger:Über die Wahlverwandtschaften.HA 6,S.638.

７）Vgl.Gonthier-Louis Fink:a.a.O.In:WdF,S.442.

８）Anmerkungen des Herausgebers zu den >Wahlverwandtschaften<.Hrsg.v.Benno von Wiese.HA 6,S.655.

９）Goethe an Karl Friedrich Zelter.Jena,26.August 1809. HA 6,S.621.

10）Vgl.Friedrich Gundolf:Goethe.Berlin 1916.7.Aufl. 1920. S.548f.

11）Vgl.Ottiliens Tagebuch.Ⅱ5:S.397.
「自由ではないのに，自由だと思い込んでいる者ほどの奴隷はいない。人は自分が自由だと公言しさえすれば，その瞬間自分は制約されているのだと

感じる。思い切って自分が制約されていると公言すれば，自分は自由だと感じるのである」
Vgl.Johann Peter Eckermann:Gespräche mit Goethe. Wiesbaden 1959.(Eckermann) S.241.13.Februar 1829.
「…しかし自然というものは全く冗談を理解しない。自然は常に真実であり，常に真面目であり，常に厳格だ。自然は常に正しく，過失という過失，誤謬という誤謬は常に人間のものだ。自然は力の足りない者を軽蔑し，力の足りた真にして純粋な者のみに服従して，自己の秘密を開示するのだ」

12) Vgl.Emil Staiger:a.a.O.S.476.

II

1) Gespräch mit Eckermann.Weimar,21.Juli 1827.HA 6, S.626.
「さてこの恐怖(Furcht)には二つの種類があり得る。つまりそれは不安(Angst)に存することがあり得るし，あるいは憂慮(Bangigkeit)に存することもあり得る。憂慮というこの感情が私達の中に萌すのは，例えば『親和力』におけるように，道徳的な災いが登場人物達に迫ってきて蔓延するのを私達が目にする場合なのだ」

2) Gespräch mit Eckermann.21.Januar 1827.HA 6,S.625.

3) Goethe:Shakespeare und kein Ende.HA 12,S.293.

4) Vgl.Goethes Gesprache.5 Bde,Hrsg.v.Frh.von Biedermann, Leipzig 1909.(Biedermann) Bd.2.S.261.Nr. 1630.
「他者のあるがままを愛している人々は少数である。大抵の人々が愛しているのは，自分が他者に貸しているもの，つまり自己であり，他者についての自らの表象なのである」

5) エードゥアルトは遙か後になって大尉に次のように真情を吐露している。(II 12:448)
「僕達は愚かなことをしてしまった。僕はそれを十二分に見抜いているよ。ある程度の年齢に達してから若い頃の願望や希望を実現しようと思う者は，いつも勘違いを起こすのだ。というのも人間の持つそれぞれの十年間はそれ自身の幸福，それ自身の希望や展望を持っているからだよ。状況や妄想に操られて前へ後へと手を伸ばす気になる人間は，ただでは済まないんだ」

6) Gesprach mit F.v.Muller.14.September 1823.In:Biedermann,Bd.3,S.3.Nr.2144.

7) GoetheanJ.H.Meyer.8.Febr.1796.In:GoethesBriefe,Hamburger Ausgabe,4 Bde.Hamburg 1964,2.Aufl,1968. Bd.2, S. 215.Nr.590.

8) Walter Benjamin:Goethes Wahlverwandtschaften.In: Gesammelte Schriften,Bd. I,1 Abhandlungen.Frankfurt / M. 1974,S.171.

9) Goethe:Urworte.Orphisch.In:Goethes Erläuterungen eigener Gedichte.HA 1,S.406.

10) Karl Wilhelm Ferdinand Solger:a.a.O.HA 6,S.635.

11) Vgl.H.A.Korff:Geist der Goethezeit.Bd.2,Leipzig 1930, S.376.

12) Gespräch mit einer Dame.1809.In:Biedermann,Bd. 2,S. 62.Nr.1250.

III

1) Vgl.Walter Benjamin:a.a.O.S.178f.
「…オッティーリエの存在においては実際あくまでも美が第一にして本質的なものなのである。…オッティーリエの美を納得させることが小説への関与の根本条件と見做されているのだ，と言っても過言ではない…」

2) Vgl.Goethe:Dichtung und Wahrheit.3.Teil,11.Buch.HA 9,S.497.u.HA 10,S.556.

3) Vgl.Ottiliens Tagebuch: II 4;S.385.
「大いなる情熱というものは治る見込みのない病である。その病を治癒し得るはずのものが，それを却ってますます危険なものとするのである」

4) Gespräch mit Eckermann.5.März 1830.In:Eckermann, S.547.

5) Goethe:Dichtung und Wahrheit.4.Teil,20.Buch.HA 10, S.175.

6) Vgl.Benno von Wiese:Das Dämonische in Goethes Weltbild und Dichtung.In: Der Mensch in der Dichtung.Düsseldorf 1957.S.73.

7) Gespräch mit Eckermann.28.Februar 1831.In:Ecker-mann, S.353.

8) Gespräch mit Eckermann.2.März 1831.In:Eckermann, S. 356.

9) Vgl.Walter Muschg:Goethes Glaube an das Dämonische. Stuttgart 1958,S.8.

10) Gespräch mit S.Boisserée.5.Oktober 1815.In:Bieder- mann, Bd.2,S.353.Nr.1723.
「…私[ボアスレー]は迷信についてこう話した。『生における神秘的なものをどれほど認めるとしても，それに対しては身を守らねばなりません』。すると彼[ゲーテ]は賛同してこう言った。『あらゆるものの中にあって，私達を囲繞している神秘的な力に対する畏敬の念を持ち続けるためには，大いにそれを尊重しなければならない。そしてこのことが真の知恵の根底なのだ』」

11）Goethes Selbstanzeige im Morgenblatt für gebildete Stande.vom 4.September 1809.HA 6,S.621.

12）Vgl.Goethes Gedicht:Spräche.Nr.16.HA 1,S.306.

「磁石の秘密よ，私にそれを教えておくれ！
愛と憎しみほど大いなる秘密はない」

13）Gespräch mit Eckermann.7.Oktober 1827.In:Ecker-mann, S.496.

「私達は皆電力や磁力のようなものを自らのうちに持っている。そして同質のものや異質なものに接するに応じて，磁力そのもののように牽引力と反発力を働かせるのだ」

14）Vgl.A.François-Poncet:Der sittliche Gehalt der >Wahl-verwandtschaften<.Das Schicksalhafte(1909).In:WdF,S. 84.

15）Goethes Selbstanzeige.HA 6,S.621.

16）Vgl.Paul Stöcklein:Wege zum späten Goethe.Hamburg 1949.2.Aufl,Hamburg 1960.Nachdruck Darmstadt 1973, S.72.

17）Grete Schaeder:Gott und die Welt.Drei Kapitel Goethe-scher Weltanschauung.Hameln 1947,S.283.

18）Gespräch mit Eckermann.29.Januar 1827.In:Ecker- mann, S.171.

19）Klaus Köhnke:Untersuchungen zur Deutung der Welt in Goethes >Wahlverwandtschaften<.In:WdF,S.375.

20）Vgl.Gonthier-Louis Fink:a.a.O.In:WdF,S.441.

21）Goethe:Schema zu Faust.HA 3,S.427.

22）Goethe:Faust.Eine Tragödie.Z.504.HA 3,S.24.

23）Gespräch mit Eckermann.23.Oktober 1828.In:Ecker-mann, S.527.

IV

１）Vgl.Benno von Wiese:a.a.O.S.76.und Grete Schaeder: a.a.O.S.96.

２）Goethe:Dichtung und Wahrheit.4.Teil,20.Buch.HA 10, S.177.

３）シャルロッテはかつてエードゥアルトにこう語ったことがある。(Ⅰ２:252)

「こういった試練を通して，オッティーリエの価値は増して行くのです」

４）Goethes Selbstanzeige.HA 6,S.621.

５）Goethe:Maximen und Reflexionen.Gott und Natur.HA 12,S.365.Nr.2.

「神的器官としての自然を否定しようとする者は，同時にあまねく啓示を否定するがよい」

６）Vgl.Gespräch mit Eckermann.11.März 1828.In:Ecker-mann,S.514.

７）Vgl.Gespräch mit H.Luden.19.August 1806.In: Bieder-mann,Bd.1,S.435.Nr.874.

「人類ですって？　そんなものは抽象的なものです。昔から存在しているのは，人間だけですし，これからも存在するのは，人間だけでしょう」

８）Vgl.Gespräch mit von Hagen.Mitte August 1805.In: Biedermann,Bd.1,S.401f.Nr.846.F.Weitze.

「カントの定言命令は人間を自律的でかつ自主的なものと前提しています。このような人間においては情熱は殆ど生じ得ませんし，ましてや勝利することも出来ません。ところでしかし人間がしばしば目に見えない力の掌中にあるのを私達は目にします　が，このような力に対して人間は抵抗することが出来ず，このような力が人間に進むべき方向を与えるのです」

９）u. 10）Goethes Selbstanzeige.HA 6,S.621.

11）Vgl.Emil Staiger:a.a.O.S.501.

12）Vgl.Grete Schaeder:a.a.O.S.303.

13）Gespräch mit Riemer.Weimar,Dezember 1809.HA 6,S. 622.

14）Walter Benjamin:a.a.O.S.140.

15）Goethe:Dichtung und Wahrheit.2.Teil,8.Buch.HA 9,S. 353.

16）Vgl.Grete Schaeder:a.a.O.S.314ff.

17）Gespräch mit Eckermann.4.Februar 1829.In:Ecker-mann, S.235.

18）Gespräch mit S.Boisserée.Auf der Fahrt von Karlsruhe nach Heidelberg,5.Oktober 1815.HA 6,S.624.

「車中それから私達は『親和力』のことを話題にした。…彼[ゲーテ]はあの悲劇的結末をどれほど迅速に引き止め難くもたらすかに重点を置いたのだ。星々はもう昇っていた。彼はオッティーリエに対する自分の関係について，どれほど彼女を愛していたか，そしてどれほど彼女が彼を不幸にしたか，を語った。最後には彼の話の雰囲気は謎めいた予感に満ちたものとなったと言ってよいほどであった」

19）Thomas Mann:Zu Goethe's >Wahlverwandtschaften< (1925).In:WdF,S.150.

附　　記

本稿は，ドイツ文学研究者としての筆者の出発点となった修士論文《Liebe und Leben ――Über Goethes >Wahlverwandtschaften<――》（京都大学大学院文学研究科 1979年２月提出）を基礎として今回新たに各章の表題を設け，加筆・訂正して纏め直したものであることをお断りしておきたい。

（受付　2001年10月26日）